

## 成果の説明書

(氏名) 岡田知之	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>近年、他国を犠牲にしても自国の経済活動を優先する保護主義的な政策がとられることが目立ち始めたが、自由貿易が世界経済に恩恵をもたらすことは、多くの人にとって否定することができないであろう。</p> <p>自由貿易が利益をもたらすことは、リカードの比較生産費説により直観的に理解することができる。よく知られているように、比較生産費説は、例えば2国間で2財の貿易が行われる状況を考察するとすれば、両国がそれぞれ比較優位を持つ財の生産に特化し、その財を互いに輸出しあうことにより、(たとえ一方の国の生産性が、2財とも、他方の国の生産性より劣っていたとしても) 両国とも、利益を得ることができることを示すものである。</p> <p>比較生産費説のような古い議論を持ち出さなくても、ミクロ経済学の一般均衡的な議論をふまれば、より一般的な状況下で貿易が世界経済に利益をもたらすことを示すことはできるが、比較生産費説は、貿易が利益をもたらすメカニズムを直観的に示している点が優れているように感じている。ただし、比較生産費説では、貿易が世界に利益をもたらすことを示すことはできるが、どの産業に特化するかについての分析は、拡張の余地があるのではないだろうか。最初に述べたとおり、近年は保護主義的な主張が目立ってはいるが、それでも世界の国々はさまざまな形で経済的なつながりをもっており、貿易により、多様な財が世界を行き交っている。このような点をふまえ、複数の国々が、多様な産業のどれに特化することが世界経済の利益につながるのかということ、比較生産費説の考え方を拡張することにより、明らかにすることを目指し、昨年から考察を続けてきた。</p> <p>多数の国が、多数の産業のうち産業に特化することが、世界経済の利益につながるかについては、古い文献ではあるが Jones(1961)によって考察されている。Jones(1961)では、各産業に特化する国の数が同じとなる特化の行われ方がクラスと定義され、(例えば5か国、2種類の産業が存在する状況下で、どの国であるかにかかわらず、A産業に2か国、B産業に3か国が特化するケースはクラスの一例となる。) すべてのクラスにおける効率的な特化の行われ方を求めることにより、すべての効率的な特化の行われ方を求めることができると主張されている。さらにn国、n種類の産業(n種類の財)が存在し、各国が1種類の異なる産業に特化するクラスにおいて、特化が効率的なものとなるための条件が比較生産費と関連付けるかたちで示され、その条件は各国が1種類の異なる産業に特化するクラス以外のクラスにも適用できると主張されている。</p> <p>個人的には、Jones(1961)で示されている特化が効率的であるための条件を一般のケースに適用することができるかどうかは、必ずしも明らかではないように感じている。昨年以來、この点を明らかにし、さらに効率的な特化が行われた場合の財の生産の組み合わせ(全世界での生産可能性フロンティア)を特徴づけることを目指し、考察を続けてきた。しかし、残念ながら、まだ十分に考察できていないのが現状である。</p>	
<p>2 その他の事項</p> <p>特になし。</p>	

### 3 次年度以降の計画・抱負

しばらくは、比較生産費説の拡張に関する検討を続けたいと考えている。しかし、現状では考察することに行き詰まっているようにも思えるので、場合によっては、新たな考察対象を探る必要があるのかもしれない。